横浜善光寺留学僧育英会三十周年を迎えるにあたって

第三、四回生　磯村　啓子
（昭和女子大学教授）

「横浜善光寺留学僧育英会」が昭和六十年に発足以来三十回目を迎えられるとのこと、誠におめでとうございます。

私は第三回生で、まだ本会の草創期という頃だったでしょうか。その頃のお話を少し申し上げたいと思います。私と本会とは初代理事長黒田武志方丈様との出逢いから始まります。ですから今を去ること二十八年前、私が大学に就職する直前の頃です。その頃私はインド、カルカッタ大学の博士課程に在学しておりました。秋の頃だったでしょうか、先代方丈様ご一行を友人のY僧侶とカルカッタ空港にお迎えに行きました。昼間の熱気が夜までトロンと残り、空港はまだインド特有の臭いと喧噪に満ちていました。飛行機は既に到着し随分時間が経っていたにも関わらず、なかなかご一行は出て来られません。やっと最後に方丈様、佐藤御老師、カメラマンの三人が出てこられたのは夜中をとっくに過ぎていました。ところが、方丈様の第一印象

にはびっくり。お腹がお相撲さんのようにひどく膨らんでいるのです。開口一番「イヤー、金持ちになっちゃったよ！」とおどけておられ、胴巻きにインドの紙幣が分厚くグルグル巻きになっていました。貨幣価値の違いから両替の際に一気に大金持ちになられたというわけです。こちらもびっくり驚きながら、皆さんに歓迎の花飾りを首に掛けて差し上げました。子供のように無邪気に機嫌良く笑っておいででした。これが先代黒田方丈様とのカルカッタ空港での最初の出逢いでした。

この日からご一行の旅にY僧侶とご一緒させていただき仏跡を巡りました。ラジギールの宿泊先である法華クラブでは朗々と愉快そうに歌を何曲も何曲も歌っておられました。その歌も実によい声をされていて上手かったので、皆聞き惚れてしまいました。また、カルカッタでは「マザーテレサの家」で高額の寄付をされました。私心の無い、きっぱりとした生き方をされている方で宗派を問わず、釈迦に還れというモットーで僧侶や仏教研究者に援助をされている方だと知りました。

その後、私は本会に奨学生として採択していただきまして、研究を続けることが出来ました。暫くして大学に就職しました。そしてその後、お陰をもちましてカルカッタ大学でPh. D.を取得致しました。それからは、事ある毎に横浜善光寺に伺う機会があり、方丈様のお話を伺っては

その大胆な行動力に驚かされることが多々ありました。その折は、いつも倫子奥様がお側におられて献身的にサポートをされていることが印象的でした。

もう一つ驚かされたことは、善光寺にある数多の陶磁器や美術品の質の高さです。黄瀬戸、信楽や丹波の大壺、鍋島や伊万里の見事な大皿それからあるときは貝葉も購入したと言われていました。方丈様は確たる美意識をお持ちの方でした。

さて、「横浜善光寺留学僧育英会」発足三十年について一番印象深い最初の思い出を当時を思い出すままに書かせていただきました。今でも黒田方丈様のにこにことしたお顔が目に浮かびます。その志の高さと清々しさ、その強靱な魂を方丈様の教えとして受け継いでいきたいと思っております。

二十一世紀に入り、世界は混迷を極めています。人類の叡智が問われている今、育英会の存在意義はこれから益々大きくなるものと考えられます。「横浜善光寺留学僧育英会」の今後のご発展を心よりお祈り申し上げております。